

固有名と役割名の焦点状態が潜在的因果性バイアスに及ぼす効果

○井関龍太*・楠見 孝
(京都大学教育学研究科)

riseki@brain.riken.jp

背景

【潜在的因果性バイアス】

- 動詞の意味によって登場人物への参照頻度が異なる
“太郎が次郎を責めたのは、彼が_____からだ。”
“太郎が次郎に謝ったのは、彼が_____からだ。”
- 動詞の種類によってスキーマが異なるため (Brown & Fish, 1983; Rudolph & Försterling, 1997) ?
行為動詞：随意的で観察可能な行為 (“謝る”など)
状態動詞：不随意的で観察不能な状態 (“憎む”など)
- 登場人物への注意の焦点化を通して作用する (e.g., Koornneef & van Berkum, 2006)
→動詞の種類の問題と注意の焦点の問題を統合して考えることの必要性
→行為動詞のみ、事前言及によって潜在的因果性バイアスの大きさが変化 (Iseki & Kusumi, 2010, Nov.)

【本研究の目的】

- 潜在的因果性バイアスが、固有名と役割名のコントラストによって影響を受けるか調べる
- 行為動詞：登場人物の地位の違いが明瞭になったことによって、より大きな効果
 - 状態動詞：登場人物の地位の違いによって左右されない

方法

実験参加者：大学生55名（うち女性29名）。

要因計画：2（言及順序：固有名－役割名・役割名－固有名）×2（動詞のタイプ：行為・状態）×2（バイアス方向：NP1・NP2）の被験者内計画。

材料：4種類のカテゴリーに分類される動詞を6つずつ (“だます”, “怒らせる”, “とがめる”など)。これらの動詞と固有名, 役割名を組み合わせ、文刺激を作成した。

“英樹が弁護士をとがめたのは、_____からだ”
(固有名－役割名順：NP1焦点化条件)
“弁護士が英樹をとがめたのは、_____からだ”
(役割名－固有名順：NP2焦点化条件)

手続き：下線部にうまく当てはまる内容を考えて、文を完成させるよう求めた。

得点化：産出された回答について、主節のどちらの人物を指すと思うか、2名の評定者が独立に判定した（一致率92.3%）。一人目の人物を指す場合は1点、二人目の人物を指す場合は二点を与えた。

結果と考察

【全体での分析】

- 言及順序×動詞のタイプ×バイアス方向の交互作用なし
→しかし、各動詞でのパターンに重点があるため、それぞれを検討

【行為動詞の分析】

- 言及順序×バイアス方向の交互作用なし
- バイアス方向の効果：NP1バイアス < NP2バイアス
→動詞のもともとのバイアスの方向は変わらなかった
- 言及順序の主効果：固有名－役割名 < 役割名－固有名
→固有名を持つ人物の行動がより産出されやすかった（談話焦点の効果）
→この効果は、動詞が持つバイアス方向にかかわらず現れた
(固有名と役割名のコントラストは、言及のくりかえしよりも強力な操作であることを確認)

【状態動詞の分析】

- バイアス方向の効果：NP1バイアス < NP2バイアス
- 言及順序の主効果：固有名－役割名 < 役割名－固有名
→基本的なパターンは、行為動詞と同じ
- 言及順序×バイアス方向の交互作用 (F₁のみ)
→NP1動詞：言及順序の効果は、ほとんどみられなかった
NP2動詞：大きな言及順序の効果
→予想外のパターン：状態動詞は主に心的状態に言及するため、NP2バイアス動詞であっても、役割名の人物には行為を帰属させにくかった？

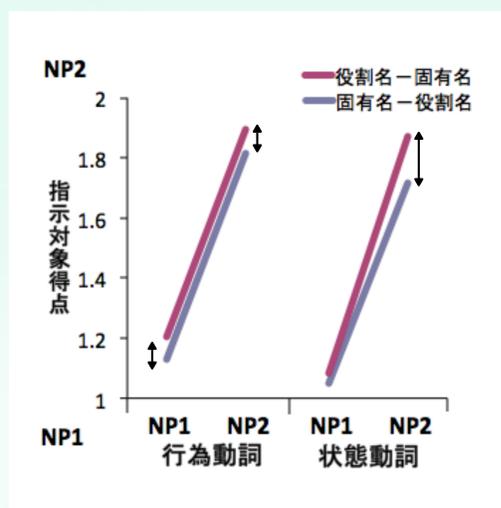


Figure 1 各条件の指示対象得点

【本研究の結論】

- 固有名と役割名のコントラストは、潜在的因果性バイアスに影響する
- a) 行為動詞のバイアスを固有名の人物方向に移動させる
- b) 状態動詞については、NP2バイアスのみに作用した理由を検討する必要がある